

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-2

元来携帯電話嫌いな横田は、余程のことがない限り持ち歩かなかった。

横田には専属契約を結んだ朝倉と言う画商がいて、仕事全般のマネジメントはほとんど任せていた。

四十代前半にして、南青山に専属アーティスト数名を抱えるギャラリーを構えるほどの辣腕画商の朝倉は、一見風采のあがらない人物のようだが、特異な審美眼と思考様式の持ち方に加え、新人のアーティストを発掘すると個々の方向性を見極め、好位置へ定着させる大胆な仕掛けを準備した。そうした外見とのギャップが幸いして、フリーランスとしての信用を押し上げるエンジンにもなった。

寡作な画家側に属する横田の制作意欲の刺激をもたらす朝倉のプロデュース力を美術業界は評価していた。

時として専属画家の個展を、経営している画廊ではなく、敢えて一流ホテルやデパートの催事場で開いて実績を上げた。

横田の画風に魅入られた朝倉は、しばしば見せる相手の感情の起伏のうねりに手を焼きながらも、硬軟取り混ぜて目論見通りの作品を生み出してきた。

朝倉はセザンヌ、ピカソ、ゴーギャン、ゴッホなど印象派やポスト印象派の画家たちのために金銭面や精神面でバックアップする傍ら、大掛かりな個展を開いて世に送り出したことで知られている美術商アンブロワーズ・ヴォラルを尊敬していた。中でもゴッホに関して言えば、彼の大ファンであった弟、テオの懸命な支援さえ悲惨な結果で終わってしまったことを見ただけでも、ヴォラルの画商としての偉業が証明される。

東京芸術大学絵画科油絵に、有名予備校でデッサンを猛勉強したにもかかわらず二年続けて受験に失敗した朝倉は、最初から私大の美術大学には行くつもりはなかったので、キッパリと方向転換した翌年に、まったく畑違いの中央大学法学部にアッサリ合格した。

卒業後民間金融機関に入社した朝倉は、新人教育の定番カリキュラムとして外回りを命じられた。

テリトリー内の訪問先に、門前仲町で倉庫を改装した斬新な画廊を経営している東京芸術大学出身の田村と言う美術商がいて、当然のことながら会話は弾むことになり、二回りの年齢差は関係なく数ヶ月後には酒を酌み交わすほどの仲になっていた。